

## Ⅱ 調査の経過

### 1. 調査の契機と遺構の措置

**調査の契機** 1971年3月から1973年5月にかけて第1表のとおり7件の開発に伴う埋蔵文化財発掘届が提出された。届はショッピングセンター1件と銀行店舗4件・学校校舎1件であり、総面積は22,900㎡になる。これらの地域は、平城右京一条二坊の地に該当し、奈良時代の官寺の一つである西隆寺跡推定地であるので文化庁の指示により事前に発掘調査をすることとなった。調査は県教育委員会と奈良国立文化財研究所とが共同で当たったが、現地は主として奈良国立文化財研究所が担当した。

**遺構の措置** 各発掘地区において第1表に示すとおり東門跡・塔跡・金堂跡・寺城南辺の築地跡などが検出された。これら各遺構の取扱いについては、県教育委員会が「西隆寺跡調査委員会」(委員名後掲)を組織し、その議を経て文化庁と協議の上、決定した。

東門跡については、「現状保存」を唯一の方法として関係企業と折衝したが、永い経緯のちついに東門の礎石群を一時撤去し、工事完了ののちに原位置に復原して店舗内に保存することとなった。

塔跡は、基壇掘込み地業の痕跡をのこすだけであったが、銀行店舗の設計を一部変更して建築用地から除外し、埋戻しの上、その上部に方形の花壇として位置を示すこととなった。

南面築地跡については、銀行店舗2件に関連して検出したが、いずれも遺構を埋戻したの

	株式会社 ダイヤモ ンディー ファミ リー	株 式 会 社 第 一 銀 行	株 式 会 社 大 和 銀 行	公 費 調 査	株 式 会 社 神 戸 銀 行	学 校 法 人 正 強 学 園	住 友 信 託 株 式 会 社
開発目的	ショッピ ングセン ター建 設	銀行店 舗建 設	銀行店 舗建 設	金 堂 跡 確 認 調 査	銀行店 舗建 設	校 舎 改 築	銀行店 舗建 設
開発面積	18,653㎡	972㎡	836㎡	—	1,074㎡	552㎡	815㎡
発掘届	1971, 3, 2	1971, 6, 9	1971, 6, 11	1971, 12, 7	1971, 12, 31	1973, 4, 4	1973, 5, 21
発掘終了	1971, 5, 25	1971, 7, 31	—	1972, 2, 23	1972, 3, 31	1973, 7, 19	1973, 7, 24
調査面積	2,500㎡	630㎡	—	1,200㎡	474㎡	300㎡	330㎡
主たる 遺構	東門、築 地戸 井	掘立柱建 物 塔・井 戸	仮設建物 につ き発掘 調査 せず。	金堂・小 路 井	南面築 地	掘立柱建 物 戸	南面築 地 戸
処 置	東門保 存 (110㎡)	塔跡保 存 (50㎡)	現水田 面以 下を 掘穿 し ない。	保存す べき	築地位 置を 地表 に表示	な し	築地位 置を 地表 に表示
備 考	第1次調 査東 門地 区	第2次調 査塔 地区 (西)	—	第3次調 査金 堂地 区	第4次調 査金 堂南 地区	策5次調 査寺 域西 北地 区	第6次調 査塔 地区 (東)

第1表 西隆寺跡発掘調査一覧表

ち、その上部に舗装タイルの色や目地の色を違えて築地を表示することとなった。

寺域西北部の掘立柱建物については、寺に直接関連する明確な遺構が検出されなかったことと、校舎改築という工事の性格もあって遺構の保存について特別な措置はとれなかった。

なお、これらの事前調査とは別に遺跡の重要性にかんがみ国費と県費による確認調査を金堂跡地区で実施し、金堂基壇の規模を明確にすることができた。

## 2. 調査関係者

### 西隆寺跡調査委員会 (順不同, 敬称略)

委員 池田武夫 (奈良県教育委員会教育長), 吉村正一郎 (古都風致審議会委員)

松下隆章 (奈良国立文化財研究所長), 坪井清足 (奈良国立文化財研究所調査部長)

末永雅雄 (橿原考古学研究所長), 寺尾 勇 (内閣総理府歴史的風土審議会専門委員)

浅野 清 (奈良県文化財専門審議会専門委員), 豊崎 稔 (奈良県都市計画審議会委員長), 原田兵次郎 (株式会社大和タイムス社副社長主幹)

幹事 池田邦三 (奈良県教育委員会教育次長), 小島俊次 (奈良県教育委員会文化財保存課主幹), 石藤守雄 (奈良国立文化財研究所庶務課長)

### 第一次発掘調査員

石野博信 (奈良県教育委員会), 泉森 皎 (同), 狩野 久 (奈良国立文化財研究所), 牛川喜幸 (同), 森 郁夫 (同), 藤原武二 (同), 村上認一 (同), 小笠原好彦 (同), 黒崎 直 (同), 西弘海 (同), 西口和彦 (関西学院大学院生), 山階正章 (日本工業大学学生) 東雲 均 (関学大学生)

### 第二次発掘調査員

牛川喜幸 (奈良国立文化財研究所), 町田 章 (同), 宮本長二郎 (同), 鬼頭清明 (同), 甲斐忠彦 (同), 田辺征夫 (同), 山中敏史 (同), 西口和彦 (関西学院大学院生), 山階正章 (日本工業大学学生)

### 第三次発掘調査員

八賀 晋 (奈良国立文化財研究所), 細見啓三 (同), 伊東太作 (同), 横田拓実 (同), 高島忠平 (同), 菅原正明 (同), 岡本東三 (同)

### 第四次発掘調査員

狩野 久 (奈良国立文化財研究所), 松下正司 (同), 藤原武二 (同), 村上認一 (同), 小笠原好彦 (同), 黒崎 直 (同), 東野治之 (同)

### 第五・六次発掘調査員

町田 章 (奈良国立文化財研究所), 伊東太作 (同), 高島忠平 (同), 加藤 優 (同), 岩本主輔 (同), 山本忠尚 (同), 中村雅治 (同)

## II. 調査の経過

### 3 調査日誌

#### 第1次調査 1971年3月10日～5月25日

3・10～13 発掘区の設定。機械力により盛土と耕土を除去する。中央発掘区から開始。

3・15～16 中央発掘区遺構検出開始。西半部の検出面は黄褐色粘質土と灰色砂が互層に入り交ったもので、東へ向い傾斜している。東半部では灰色砂が主体となる。瓦積列（のちのSA003）を認める。南発掘区盛土・表土除去。

3・17～18 北発掘区遺構検出。中央発掘区と同様に黄褐色粘質土上面に遺構を認めるが西端部のみで、以東は褐色砂質土で切られ遺構はみとめられない。

3・19～20 北・中央発掘区遺構検出続行。南発掘区遺構検出開始。検出面は灰褐色砂質土の地山であるが、発掘区東半部は砂層により攪乱されている。柱穴と土塊状の落込み（のちのSE010）を認める。

3・22～23 中央発掘区で瓦積列と直交する南北溝（SD005）と凝灰岩製の暗渠を検出。溝肩には矢板が認められる。南発掘区では東西棟建物まどまる。他に小溝・小穴などがある。

3・24 中央発掘区東端付近で凝灰岩製の板石を認める。「調査委員会」発足。

3・25 中央発掘区の凝灰岩板石の性格を追求。約10尺間隔で計3個を検出。東門（SB001）の礎石と断定。

3・26 SB001の規模を追求するため発掘区を拡張。午後雨天のため作業中止。

3・27 排水作業。

3・29～4・1 中央発掘区の拡張。新しく発掘区中央部を南へ拡張する。盛土・表土除去。

4・2～3 中央発掘区南拡張区の遺構検出。東半部は砂層で攪乱され遺構はない。2間×4間と推定できる南北棟建物（SB008）を検出。他には顕著な遺構はない。中央南発掘区盛土・表土を除去する。

4・5 SB001北半分の遺構検出。SA003に対応する瓦積列（のちのSA004）を検出する。SB001の基壇西縁を示す石列と浅い溝を検出。

4・6～7 中央発掘区南拡張区西端部の遺構検出。東西溝（SD007）から緑釉片出土。SA004の検出。

4・8～9 SA004とSD005の交点を調査するため発掘区を拡張。盛土・表土除去。

4・10 南・北発掘区の清掃を開始。寺域東面築地の検討。SB001の南方で幅1.8mの灰色砂を含む粘土層の高まり（のちのSA002）が注意される。ただしSB001との取付きは不明。

4・12～13 遺構清掃・写真撮影。中央南発掘区遺構検出開始。検出面は黄褐色粘質土であるが、ここでも東半分は砂層により攪乱されている。遺構には小穴が多く建物にまどまらない。このうち2つの土塊状の落込み（SK015・016）から古墳時代の土師器が出土した。写真終了部分から実測の準備にかかる。

4・14 遺構実測開始。北発掘区東半部をたち割り土層を実測するが、これに伴いSX035を認めSX035から木簡が出土、多数の椀皮。木片を伴う。

4・15～16 遺構・土層図実測続行。北発掘区SX035を調査。SB001礎石裾付け痕跡の検討。棟通り中央間の礎石及び地覆石には2回の裾付け痕跡がみられた。南北溝拡張区の遺構検出。SD005とSA004の交点に凝灰岩製の暗渠検出。

4・17 雨天のため作業中止。

4・19 北発掘区SX035の補足調査、木簡数十点出土。東大門周辺を除き実測。補足調査終了。

4・20～22 SD005及びSA004暗渠の調査、SX033から木簡出土。

4・23 SB001付近の遺構清掃・写真撮影。

4・24 実測SB001基壇のたち割り、基壇下に奈良時代前半の遺物が入るSX036を認める。

4・26 東大門と南北溝間に瓦敷舗道（SF006A）を検出。東大門及びその周辺の遺構に2時期あることが明確となる。

4・27 SA004暗渠下部及びその西方のSX033から木簡多数出土。補足調査・写真撮影・実測。

4・28 SX033を追求。実測、写真撮影、発掘調査終了。

5・22 工事進捗に伴い東門礎石の取上げ準備。礎石・地覆石に墨と番付をうつ。

5・23 礎石取上げ、その後、礎石下の根石の調査。基壇のたち割り調査。

5・24～25 根石及び基壇土の実測。写真撮影。調査終了。

**第2次調査** 1971年7月5日～7月29日

- 7・5～7 工事のための盛土を機械力で除去。  
 7・8～10 暗褐色遺物含包層を掘り下げ、黄褐色粘質土上面で遺構を認める。この下には灰褐色粘質土があり、次いで地山土（暗灰色砂質土）となる。遺物は南へ行くにしたがって少ない。  
 7・12 北端から遺構検出開始。SD045, SB040, 041を認める。遺構は黄褐色粘質土から切込んでおり、柱穴には黒褐色土が入る。  
 7・13～14 SB040南側柱列を検出。大きな土壇状の下がりを2ヶ所で認める。（のちに、SB050とSE060と判明）、黄褐色粘質土が薄くなり灰色砂質土が遺構面となる。  
 7・15 南半部を遺構検出、東西方向に黄褐色粘質土が分布し、築地の痕跡とも考えた。古墳時代の土師器を出土する小土壇を認める。前に検出した土壇状の落込みは塔の掘込み地業（SB050）の可能性あり。  
 7・16 SB050検出部分、写真と上層図をとり、発掘区を西へ拡張する。  
 7・17 拡張部分の遺構検出。掘込みは、一辺約6mのほぼ方形であり、塔跡と断定。  
 7・19 掘込みの東半分を若干掘り下げ。グリ石多数検出。SB040の西側柱列を検出する。  
 7・20 掘込みを全面掘り下げる。グリ石の散乱は全面に認められたが、礎石根石はない。西南部には凝灰岩の断片も混入。  
 7・21 発掘区を清掃し、写真撮影をおこなう。  
 7・22～24 遺構平面図実測。  
 7・26 上層図実測、補足調査、推定築地部分をたち割る。明確な築地遺構を認めず、下層にも遺構は検出できなかった。  
 7・27 掘込み東側の土壇状遺構を掘り下げる。2ヶ所とも井戸であることが判明、SE060は粹組が残存し、遺物も多い。  
 7・28 SE060掘り下げ、拡張区の補足調査、包含層から埴片が出土。  
 7・29 井戸粹取上げ、本日で調査終了。

**第3次調査** 1971年12月6日～1972年2月5日

- 12・6～8 発掘調査準備、現場小屋建設。  
 12・9～11 表土を除去する。  
 12・13～15 表土除去続行。電気のベルトコンベアに換える。床土の下すぐに遺構面（褐色土）となることを確認する。

- 12・16 地区杭設置、床土を除去しながら遺構検出開始。北側で南北溝2条と東西溝1条を認める。東西溝には凝灰岩片が多く入っている。  
 12・17 南北溝2条（SD095,110）を追求する。SD095からは土器が多く出土する。発掘区東端の一部に凝灰岩片と瓦片が散布している。  
 12・18 SD095・110追求、他に柱穴・土壇などを検出する。褐色土の遺構面は南へ下がり気味である。発掘区東南隅でL字形にならぶ凝灰岩を検出。金堂基壇（SB100）の可能性が大きい。  
 12・20 多数の小穴を検出するが現状では建物にまともならない。井戸2基（SE080・090）を認める。  
 12・21 SE080を埋めた灰色粘土から木簡1点出土する。井戸粹の存在を確認。  
 12・22～23 SD090・110を追求し発掘区南端に至る。土壇状の落込みから奈良時代前半の土器出土する。  
 12・24～25 遺構検出続行。東西溝と南北溝の重複関係を検討し、東西溝が新しいことを確認。南北溝には奈良時代前半の土器が入っている。西側で井戸（SE130）を検出。井戸粹残存。井戸を埋めた暗褐色土から土器が出土し、奈良時代前半で廃絶していることが判明。越年の準備。  
 1・7 発掘調査再開、東側に拡張区を設定。  
 1・8 発掘区北端の遺構を整理する。SD090・110の2条は対になるもので小路側溝の可能性を推定。溝肩の状況から2時間の可能性がある。東西溝は金堂（SB100）の基壇に関連する遺構で、SD090・110間は北へ突出し階段の痕跡と推定。  
 1・10 東拡張区遺構検出。井戸（SE075）と土壇（SK070）及び小穴を認めるが、SB100と関連する遺構なし。  
 1・11 雨天のため作業中止。  
 1・12 新しく南に拡張区を設定し、SB100の東端を追う、南北に通る凝灰岩片を含む溝状の遺構を認める。この溝は西へ折れまがり、この部分をSB100の基壇東南隅と断定する。  
 1・13 南拡張区の遺構検出。凝灰岩列の内側に約50cm幅の溝があり、あるいは地覆石の抜取り痕跡か。外側では瓦と礫の敷面があり雨落溝は検出できなかった、中門発掘区を設定する。  
 1・14～15 SO090・110の輪郭を検出して掘り下げる。溝間2丈程になる。発掘区全域で認めた多数の小穴を整理する。2～3棟の建物をまとめたが、大半の小穴は建物にまともならない。講堂発掘区設定。

## II. 調査の経過

1・17 中門及び講堂発掘区を遺構検出。ともに明確な遺構が認められない。遺構を清掃する。

1・18～19 写真撮影。

1・20～22 遺構平面図実測。

1・24 雨天のため作業中止。

1・25～27 遺構平面図・土層図実測。

1・28～29 補足調査，SE080掘下げ，土層図実測，写真撮影。

1・31 補足調査続行，SB100の基壇西縁を確認する目的で，畦畔部分を拡張する。

2・1 雨天のため作業中止。

2・2～3 SB100の西縁は，畦畔下に凝灰岩列を検出して確認。しかし階段の痕跡は認められない。SE085・130井戸枠取上げ，中門発掘区補足調査。

2・4 雨天のため作業中止。

2・5 SE130の井戸枠取上げ，中門発掘区写真撮影。調査を終了する。

### 第4次調査 1972年2月23日～3月16日

2・23～26 機械力により盛土・表土を除去。

2・28～29 地区杭を設置。床土を除去する。

3・1 雨天のため作業中止。

3・2 遺構検出開始，床土下にある黄褐色粘土を除くと暗褐色土となり，この上面で遺構がみえる。発掘区北端で浅い溝（SD192）を検出。回廊南雨落溝の可能性を考える。

3・3～4 発掘区中央部南寄り，瓦の多量に入った土壌群（SK173～175）を検出。上層から二彩陶器の破片が出土。南端で茶褐色粘質土の高まりを検出した。南面築地の可能性が大きい。

3・6～7 築地及び回廊痕跡を追求するため北と南で発掘区を拡張する。瓦溜りの範囲を追求するため中央部でも発掘区を拡張する。

3・8 北拡張区で2条の溝（SD191・192）を認める。南拡張区では東西溝（SD161）が明確になる。門の痕跡は認められない。

3・9 北拡張区の溝（SD192）は南へ折れまがり直接回廊と関連しない。瓦溜りの範囲を確認した。

3・10 遺構清掃・写真撮影。

3・11 補足調査，瓦溜りを底部まで掘下げる。

瓦多数出土。土壌の時期判明。

3・13 補足調査。

3・14 遺構平面図。

3・15 遺構平面図，土層図実測。

3・16 土層図実測，調査終了。

### 第5次調査 1973年7月2日～7月19日

7・2～5 発掘区の整形，基準点の移動と地区杭の設置，排水溝を発掘区周囲に設ける。

7・6～7 遺構検出開始，東南隅部は黄色地山土面で検出する。灰色あるいは黒色土の入る小穴を検出。西南隅部では地山土の上に暗褐色土があり，この上面から溝が切込まれている。

7・9 遺構検出続行。土壌・溝・柱穴を検出するがまとまらない。遺構には黒灰色粘質土を埋土とするものと黄褐色砂質土を埋土とするものがあり時期的な差が考えられる。

7・10～11 斜行溝（SD205）には暗褐色砂が入り，他の遺構より古い様子である。SE203を検出。3間×2間と3間×3間の2棟の建物とまる。南端には大型の柱穴があり，南へつづく。

7・12 3間×3間の総柱建物と南端で検出した建物（SB200）とは柱穴重複を検討の結果SB200の方が新しいことが判明。北端では東西方向の細溝を5条検出した。遺構検出終了。

7・13 遺構清掃・写真撮影。

7・14 実測準備。

7・16～18 遺構平面図・断面図実測。補足調査，柱穴たち割り，SE203掘下げ。

7・19 柱穴・井戸など埋戻し，調査終了。

### 第6次調査 1973年7月9日～7月24日

7・9～10 床土除去作業，地区杭設置。

7・11 暗褐色土を掘下げ遺構検出開始，SK292土壌を検出。土器・瓦片が入る黒色土が埋めている。遺構検出面は砂層地山面である。

7・12 SE279検出。発掘区南端で土塁状の高まりを認める。

7・13～14 発掘区南端の高まりは溝を伴い築地（SA160）の可能性が大きい。南半分は小柱穴が多いが建物としてはまとまりにくい。

3・16 発掘区北端において第2次調査時に認めたSB040の東半部分を検出する。

3・17 遺構清掃・写真撮影。

3・18～19 遺構平面図・土層図実測。

3・20 補足調査開始，SE279を掘下げ。SB040柱穴を西に追求する。発掘区西南隅でSE261を掘下げ。南面築地部分を一部拡張する。

3・21 SE279写真撮影，築地南側の溝を検出。

3・23 補足調査部分の写真撮影・実測。

3・24 調査終了。主要遺構を埋戻す。